

薩摩塔の基礎的研究

井形, 進

<https://hdl.handle.net/2324/7363911>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 論文博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 井形 進

論 文 名 : 薩摩塔の基礎的研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

薩摩塔とは、昭和 33 年 (1958) に鹿児島県の薩摩地方で初めてその存在が知られるようになったことから、その名がある石塔である。やがて平戸や福岡平野等からも確認されるようになり、現在ではむしろ九州北西部を中心としつつ、50 基が確認されるに至っている。分布域は広がったがほとんどが九州西側にあり、この傾向は今後も変わらないだろう。このような薩摩塔については、いつどこで造られたのか、しばし見解が定まる所がなかった。確実な銘文をもつものが存在しておらず、また史料にもほとんど登場しないからである。

そのような中で平成 20 年 (2008) に、福岡県久山町の首羅山遺跡の薩摩塔について、13 世紀半ばの中国、南宋で制作されたものであると絞り込んだ。その後、最古の薩摩塔と目されていた、長崎県平戸市の志々伎神社沖都宮の作例が、13 世紀前半の中国、やはり南宋での制作であると絞り込み、そして志々伎神社中宮にあり、最も新しい作例の一つと目されていた塔に確認された銘文の検討から、これが 14 世紀前半、元時代の制作であることが指摘できた。ここに薩摩塔は、13 世紀から 14 世紀にかけての中国で制作されてもたらされた石塔である、と考えることができるようになったのである。第 I 篇の「薩摩塔研究の基準設定」は、首羅山遺跡と志々伎神社において行った、以後の研究の礎となった基準設定にかかる考察と、それにあたり大きな役割を果たした宋風獅子の考察を、あらためて進めて収めるものである。

薩摩塔において、その時間的な広がり of 初期、半ば、末期で基準的作例が設定できたことを受け、それらを足掛かりとして基準を増やすことを試み、誰が何のためにもたらしたのかを明らかにする視点を探ったのが、第 II 篇の「基準からの展開と研究深化の視点」である。ここではまず、福岡県太宰府市の宝満山伝来の薩摩塔について、首羅山遺跡の作例との比較から、彼の塔と同じく南宋時代、13 世紀半ばの制作であることを指摘した。鍵になったのは塔に刻まれた尊像である。薩摩塔では尊像をはじめとする彫刻表現が、考察に重要な役割を果たす。続いて、薩摩塔の特質を浮き彫りにするために共に考えるべきと思われる、宮崎宮や宗像大社の中国渡来石造物について考察を加え、それぞれ制作や渡来の時期を押さえると共に、主役として僧ではなく中国の海商たちに光を当てた。同じく福岡平野周辺にあっても、大陸渡来文物の受

容のあり方が多様であったことも、ここで示している。また、薩摩でも基準を設定するべく試み、鹿児島県南さつま市の水元神社の薩摩塔について、13 世紀後半から 14 世紀初頭、つまりは元時代の制作であること、そして薩摩の作例は総じて 13 世紀後半以降の制作であるらしいことを指摘し、その背景に中国の海商たちの動向の変化を想定した。

薩摩塔は、基本的に南宋時代から元時代にかけて制作され、中国の海商たちのある種の宗教施設として日本にもたらされ、居住地に限らず彼らにとって大切な場所に設置されたと考えられる。第Ⅲ篇の「薩摩塔の背景と研究の展開」は、このことについて考察を深化させると共に、今後の研究の方向性を見定めるべく意図したものである。まずは、九州に所在する中国渡来石造物について、福岡平野の場合を中心としながら、所在する場共々あらためて考え、さらにそれらを対比的に考察した。その中で薩摩塔は、日中間を往来する中国の海商たちにとって、最も基本的な石造物であることが指摘できた。設置の目的はさまざまに想定できるものの、海路の安寧祈願を基本とするのは確かであろうと考える。日中交流の影の主演でありながら、史料に登場することが多くはなく、考古資料からもその信仰の具体相などは知り難い中国の海商たちを知る上で、薩摩塔こそは、他をもって代えがたい価値をもった資料なのだと考えている。

また先述の通り薩摩塔には、多彩な彫刻表現がなされている。これらは南宋時代から元時代の彫刻の、新たに参照可能になった作品群である。ただ本研究においてはまず、薩摩塔の背景を考える手掛かりとして、これらの検討を行っている。背景にあるのは仏教的なもののみならず、さまざまな要素が流れ込んだ世界のようなものであるが、それは、僧や士大夫らの言う儒仏道の三教一致というような世界とも異質な、土俗的な趣をもつものと見える。その中でいま注目しているのは、成尋の『参天台五台山記』に海商たちの信仰の対象として登場する、僧伽である。薩摩塔の塔身の尊像は、僧伽ないし彼ゆかりの尊像が含まれている可能性がある。そして第Ⅲ篇の最後には、京都や奈良の南宋渡来ないし南宋風石造物や、薩摩塔との関係が指摘され宋時代のものは浙江省の沿海地域に集中する、窠堵波式石塔について検討し、それらと薩摩塔の対比も試みた。その結果言えるのは、日中間を往来する中国の海商たち自らにとっての宗教施設である薩摩塔には、やはり日本僧を主演とする京都や奈良の南宋渡来ないし南宋風石造物や、中国にある窠堵波式石塔等とは、重なりを見せつつも異なった、薩摩塔ならではの信仰と造形の世界があるということである。薩摩塔研究は、これまであまり意識されてこなかった歴史の空白を埋める大きな意義をもつと考えている。

平成 20 年（2008）に初めて制作の時空が絞り込まれて以来、薩摩塔は、学界に大きな刺激を与えてきた。しかし既に少なからぬ研究成果が挙げられながら、研究の深化が早くも停滞しているのは、研究の基盤が確立されていないからであろう。本研究は、美術史学や考古学、対外交流史を中心に、史学系のさまざまな分野にとっての、新たな重要な資料群である薩摩塔について、基準を定め、基準的作例にかかる精確な基礎資料を提供し、背景を検討し、そして今後の研究の方向性を示すことによって、初めて研究の基盤を確立し、共有しようとするものである。